

講師と教諭の壁

中崎 裕司

○講師時代

「3年ぐらい経験を積んで、常勤講師してから受かればいいや」という軽い気持ちのまま、大学を卒業し、ある高校に非常勤講師として赴任しました。もちろんそんな軽い気持ちのまま受験したこともあって2015年、2016年と結果は不合格。その後、ぼちぼち勉強を始めた頃、ある地歴科の先生が倒れ、自分が常勤講師としてその代わりを埋めるために初めて、学年団に入れさせてもらいました。授業以外での生徒との関わりが激増し、今まで非常勤講師で授業しかこなしてこなかった自分にとって、毎日が新鮮で教師という仕事のやりがいを感じることができました。また初めて部活動の顧問を経験しました。自分が顧問になった時から、部員同士や主顧問の先生との揉め事が絶えない部活でした。そのため、ほぼ初対面の生徒を相手にミーティングを行うなど、問題の解決に奔走した毎日でした。その結果かどうかはわかりませんが、揉め事もおさまり、少しではありますがチームを立て直すことができましたと思います。本当に良い経験ができた毎日でした。

しかし、その学校を年度末で出ることになりました。その時に抱いたのが「なんで自分がこの学校を出なければならぬのか」でした。答えは簡単で「講師」だからです。講師はどれだけ生徒から人気があり、部活動で功績をあげても、契約期間が終われば切られる。この時、初めて「講師と教諭の壁」というものを実感しました。（自分が教諭であれば来年度もこの生徒と関わられたのに）そして、この経験が最初の軽い気持ちから「絶対今年（2017年）受かって教諭にならなければならない」という気持ちに自分を変えさせてくれました。この気持ちの変化が受験勉強のモチベーションにつながったと思います。

○受験勉強（9月～7月にかけて）

合格するために自分に足りないものは何か。それを徹底的に突き詰めて考えた受験勉強期間でした。前年度の試験では専門教養はまずまずでしたが、一般教養でまったく点を取ることができませんでした。中でも数学と理科は一間も正解できず、これが不合格の原因だと確信しました。正解するために、中学生向けの参考書を購入し関数、確率、生物、化学、地学、物理と基本的な問題を中心に勉強しました。勉強していると難しい問題が出てきて、なかなか正解できないのですが、兵庫県の場合は基本的な問題しか出題されないのので、不正解でも気にせず、基本問題に重点を置くことが重要であると感じました。

また、教職教養は一般教養の中で唯一、出題される範囲が決まっている分野なので絶対に満点を取ることを目指して勉強しました。多くの参考書に手を付けるのではなく、一冊の参考書を何度も何度も繰り返し勉強しました。

専門教養に関しては、日本史、世界史、地理の一間一答の問題集で基礎を固め、また世

界史、地理はセンター試験の赤本をひたすら解きました。（日本史は授業で教えていたこともあり、一問一答の問題集しかしませんでした。）中でも、地理の地形図の問題で他の受験生と差がつくところだと思うので、センターの赤本で慣れておくことが必要であると感じました。

二次試験（個人面接）では終始、和やかな雰囲気面接が進みました。大学時代のこと、教科指導、部活動、学級経営を中心に質問されました。その中で感じたことは、面接官の質問に対して、100点のことをしゃべろうとするのではなく、自分の思ったことを、自分の言葉で話すということでした。100点の答えを話そうとするから、なかなか言葉が出てこず、気まずい雰囲気になり不合格になるのではと感じました。やはり、面接は練習あるのみだと思います。早めに自分の苦手分野を把握し、その時期にあった対策を立てていくことが合格につながると感じました。